

下町文化

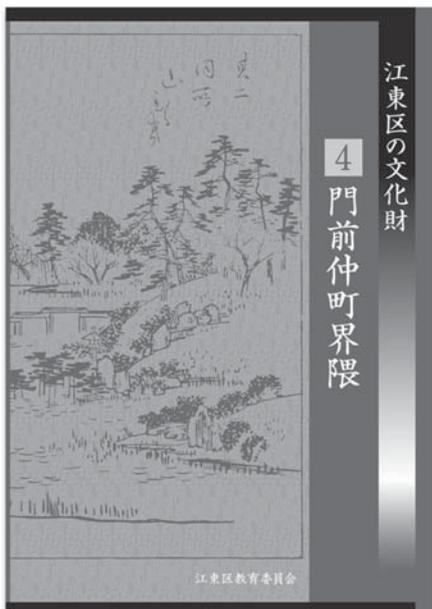
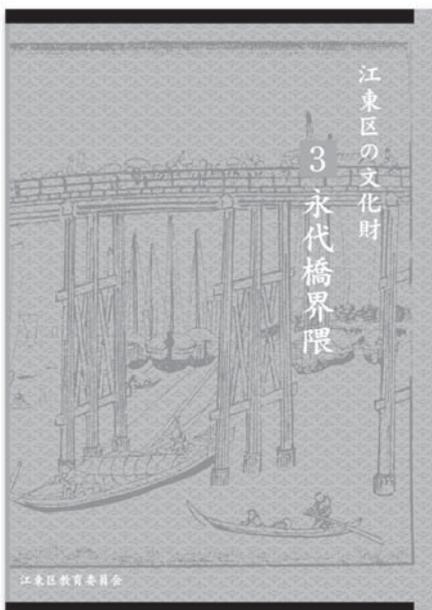
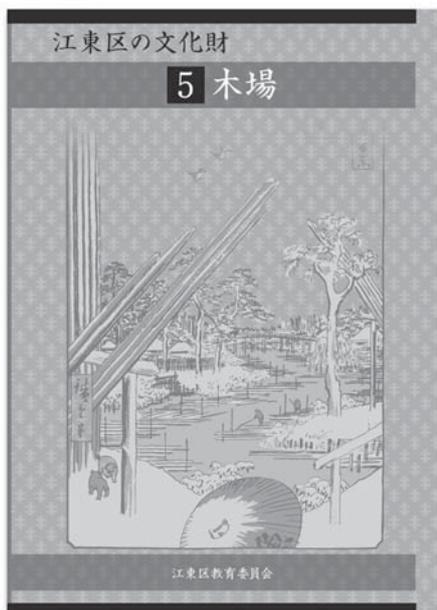
NO. 246
2009.7.10

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.
lg.jp/

好評
発売中!

『江東区の文化財』シリーズ 4冊に

—見どころ・読みどころを紹介—



- 『江東区の文化財』シリーズ 4冊に
—見どころ・読みどころを紹介—
- あるく・みる・きく・かく文化財レポート
★「深川浜」の名が刻まれた奉納物
- 区指定文化財
石造燈明台移設の記録
- 中川船番所資料館企画展示
「旧中川から見た亀戸」
- ☆20年度委託調査・区外史料調査報告
中川番所の史料をもとめて三
～奥州幕領の廻米輸送～
- ◆ココにも歴史があった
- ◆旧大石家日記⑨

『江東区の文化財』シリーズは、この春の新作をもって、全8冊の半分、4冊が出版されました。区内を8つの地域に分けて、それぞれの地域に残る文化財を紹介しています。さらに、地図やコラム・史料編などを加え、情報が満載されています。文化財めぐりのお供にも最適です。

既刊に収録の地域

③ 永代橋界隈
〔佐賀・永代・福住・深川・越中島〕

④ 門前仲町界隈
〔門前仲町・富岡・牡丹・古石場〕

⑤ 木場
〔平野・冬木・木場・東陽〕

⑧ 砂町
〔北砂・南砂・東砂・新砂〕

各A4判 各65頁程度、価格500円

販売場所

江東区役所6階6番 文化財係
江東区役所2階こうとう情報ステーション

芭蕉記念館・中川船番所資料館

今後の刊行予定(仮称)と収録地域

① 深川ゆかりの地

〔猿江・常盤・住吉・新大橋・森下・清澄・石島・千田・扇橋・毛利〕

② 深川寺町
〔三好・白河〕

⑥ 香取神社と亀戸天神(今年度刊行予定)

〔亀戸1～3丁目〕

⑦ 亀戸東部・大島

〔亀戸4～9丁目・大島〕

③ 永代橋界隈

隅田川河口東側に位置し、元禄11年(1698)に架橋された永代橋のたもとに広がるこの地域は、さまざまな文化が交差した地域といえます。

見どころ・読みどころ

佐賀稲荷神社(佐賀2)の「天水桶」は米の流通に関わる商人たちにより奉納されました。「いろは蔵跡」「元木場跡」は、かつては堀割が縦横に走り、江戸湊の一翼になう物資の集散地として機能してきたことを物語る史跡です。蔵や河岸で働く人々の間から生まれた芸能が米俵を使って力自慢を競う「深川の力持」です。法乗院・玄信寺(深川2)・正源寺(永代1)は、「深川御師町」の成立と同時期に創建された由緒ある寺院です。



天水桶(佐賀稲荷神社)



ラムゼー碑上部刻銘(東京海洋大学)

史料編では、区内で一番古い歴史を持つ明治小学校の由来を示した「明治校碑」、三菱商船学校の教員ラムゼーの功績を記した「ラムゼー碑」の碑文などを掲載しています。

④ 門前仲町界隈

門前仲町および周辺の文化財を掲載しています。富岡八幡宮や別当永代寺、明治に建立された深川不動堂の門前を中心に栄えた地域です。

見どころ・読みどころ

日本で初めて詳細な地図を作成した伊能忠敬は、深川黒江町の自宅から全国測量の第一歩を踏み出しました(伊能忠敬宅跡) 門前仲町1)。勸進相撲発祥の地・富岡八幡宮(富岡1)には「横綱力士碑」「釈迦の碑」など相撲関連の文化財が残ります。末社の永昌五



横綱力士碑(富岡八幡宮)

社稲荷は肥料商の信仰を集めた神社です。「二軒茶屋跡」など門前町の賑わいを伝える史跡も華を添えます。深川不動堂(富岡1)の奉納物からは、不動信仰の奥深さを感じられます。

史料編では、「石造燈明台 明治31年在銘」(富岡1)、深川不動堂や富岡八幡宮に奉納された石碑の銘文を掲載しています。かつての町名や人名から信仰の形態が窺えます。

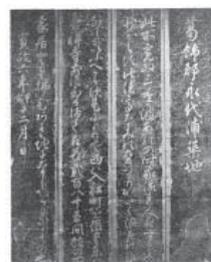


二軒茶屋(『江戸名所図会』)

⑤ 木場

江戸時代から約300年にわたって木材の集散地として機能してきた木場周辺の文化財を紹介しています。

見どころ・読みどころ



波除碑拓本

洲崎神社(木場6)境内には、寛政3年(1791)

の高波の後、付近一帯を空き地としたことを示す石傍示「波除碑」が残ります。冬木弁天堂(冬木)のある冬木は、江戸時代の材木商冬木家ゆかりの土地です。材木問屋の豪奢ぶりが偲ばれます。水面に浮かべた角材を乗りこなす「木場の角乗」、木材を水から揚げる時に調



「深川ふゆき弁天」小林清親画

子を合わせるために唄った「木場の木遣」は、木場の材木業者の間から生まれた民俗芸能です。

史料編では、浄心寺(平野2)とゆかりの深い歌舞伎役者中村歌右衛門奉納の「梅玉之碑」の銘文や震災前の木場の様子を写した、深川区史の写真に掲載しています。



深川木場(『深川区史』図版)

⑥ 砂町

江戸時代から都市近郊の農産地として機能してきましたが、時代の流れとともに工場地帯、住宅地へと変貌をとげた地域です。

見どころ・読みどころ



庚申塔(志演神社)

志演神社(北砂2)には、農村地帯だった砂町の庚申信仰の形態を物語る

「庚申塔」が5基残ります。因速寺(東砂1)の本尊「木造阿弥陀如来立像」は鎌倉時代に製作された仏像で、体内に安置されていた文書から、古くから当寺に伝来していたことがわかります。富岡八幡宮(南砂7)の富士塚には、「経ヶ嶽碑」「小御嶽神社」ほか、富士講に関連する石碑が残されています。「八右衛門新田」「萩新田」「大塚新田」「治兵衛新田」などかつての地名を刻む文化財が多いことや、土佐藩、若桜藩、徳島藩、長州藩など大名家の屋敷にまつわる史跡が残ることも特徴のひとつです。



砂町の富士塚(富岡八幡宮)



経が嶽碑(同上)

「深川浜」の名が刻まれた奉納物

「深川浜」という名称をご存じですか。かつて深川で漁業に従事していた人々は、「深川浜」または「深浜」と称した結びつきをもっていました。三年に一度の富岡八幡宮大祭の神輿連合

渡御で最後に登場する深浜神輿は有名です。その他、寺院や神社の奉納者銘にその名称を使うことが多くありました。

区内に残る「深川浜」という名称が刻まれた石造物とその刻銘の中に見られる人名をまとめたものが左の表で

「深川浜」の刻銘がある石造物

奉納石造物 /奉納年	刻銘 (関連のあるもののみ抜粋した)
① 石造燈明台 明治31年(1898) 在銘 (深川公園)	深川濱/深川濱山菊/深川濱佃勝 杉菊/深川濱佃徳 波芳/深川水溜 杵兼 桶忠 泉豊 大六/深川水溜 山半 山三 山□/深川水溜大平六 尾金 山定
② 石造燈籠 深川浜常燈講奉納 明治45年(1912) 建立 昭和6年(1931) 再建 (富岡八幡宮)	中川友一/小川常次郎/今氏清左衛 門/池田辰蔵/相馬甚五郎/松永寅吉 /本多辰次郎/鈴木金太郎/田中六次 郎/鷺直次郎/大濱文次郎/鶴本金太 郎/近藤卯吉/松永勝次郎/山口定吉 /小川久吉/清水権次郎/佐野延太郎 /鈴木君三/岩瀬亀次郎/豊島松太郎 /林源太郎/五木田次郎吉/川嶋新吉 /瓜生重太郎/斎藤勝蔵/鳥見庄次郎 /山田友七/富永治兵衛/吉田助蔵/ 鈴木幸治郎/水野秀吉(昭和6年再建時)
③ 石造狛犬 大正10年(1921) 在銘 (富岡八幡宮)	尾金/水音/五木田/御正信友/小川 仏/池吉/加虎/中竹/□定/小川久/ 鈴赤/松政/佃勝/佃徳/□浅/土仙/ 下長/川豊/伊勢文/池豊/蠣新/平亀 /西辰/杉善/今氏/丁源/大濱/竹尋
④ 石造玉垣 年代不明 (富岡八幡宮)	深川濱/伏亀/水音/林直吉/尾金/ 加虎/川嶋新吉/鷺直次郎/小川又吉 /今氏清左衛門

す。これを見ると何名か共通した人名が認められます。

①石造燈明台は日清戦争(1894~95)の勝利を記念して、深川不動堂の燈明講によって奉納されたものです。平成19年度に深川不動堂から江東区に寄贈され、翌20年度、深川不動堂西隣の深川公園に移設されました。刻銘に見られる「深川濱山菊」「大六」「佃勝」「大平六」は魚問屋で、なかには、当時日本橋にあった魚河岸の議員を務めた人物も含まれます。「佃勝」「佃

徳」は③石造狛犬にもその名が見られます。「深川水溜」を冠する10名は世話人ですが、その中の「尾金」も魚問屋で、土地の人々から「尾金さん」と呼ばれ、信望が厚かったそうです(『江東区民俗調査報告書―深川浜・東砂地区総合調査』)。尾金の名前は③石造狛犬と④石造玉垣にもみられます。

②石造燈籠は明治45年(1912)に富岡八幡宮の常燈講により奉納されました。再建時の刻銘のうち「鷺直次郎」「五木田次郎吉」「川嶋新吉」は深川区の漁業者総代を務めた人物で(『東京湾漁業史料』)、③石造狛犬、④石造玉垣の奉納にも関わっています。

③石造狛犬は、富岡八幡宮の合末社にあり、大正10年(1921)に深川睦会として「佐賀町」「木場」「深川濱」の有志により奉納されたものです。ここでの深川浜は、深川地域を代表する産業のひとつとして捉えられます。



石造狛犬刻銘(富岡八幡宮)

④石造玉垣は、同じく合末社に奉納されたもので、深川浜のほかには、熊井町、黒江町・中島町などの有志による奉納で、漁業関係者だけではなく寄



石造燈明台(深川公園)

席や時計店・呉服店・牛肉店などの職業がみられ、地域のなかの共同体のひとつとして奉納に参加していることがわかります。このように、

奉納石造物の刻銘から、地域の寺社信仰に関わる講員として、地域を支える産業の担い手として、あるいは町の構成員として、深川浜の人々は何重にも結びついていたことが見えてきます。また、これらの石造物は、地域の信仰形態を知るうえで貴重であるとともに、それぞれの性格から、時代の風潮、地域のつながりなどを読み解くことが可能です。『江東区の文化財④門前仲町界隈』(平成20年3月刊行)史料編には、今回ご紹介した石造燈明台の刻銘のほかにも、多くの文化財の刻銘が収録されています。地域史の新たな側面を探ってみてはいかがでしょうか。

(文化財主任専門員 向山伸子)

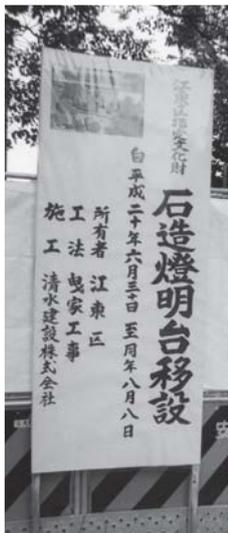


石造玉垣(富岡八幡宮)

石造燈明台移設の記録



↑ 移設に備えて養生が施された



地域のシンボルとして愛されて来た文化財を護るため、教育委員会文化財係と不動尊、門前講及び住民の支援により、移設決定。平成20年5月より本体の保護工事が施行された。



↑ 移動の様子



↑ 土台組み



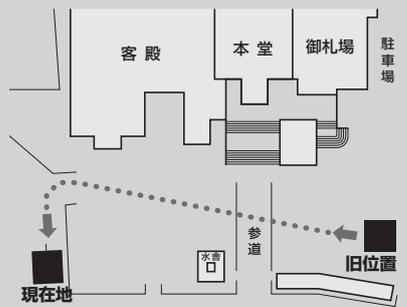
↓ 移設先の耐震工事



↓ 本堂前を通過

江東区指定有形文化財（建造物）「石造燈明台 明治31年在銘」は、平成20年夏、深川不動堂の境内整備に伴い、西側に隣接する深川公園へ移転しました。移転の方法は、燈明台を崩さず、そのまま少しずつ移動させる「曳家工事」の方法がとられました。移動に際し、外壁に貼ってある石板が剥落しないように補修工事を施し、7月から移動を開始し、約1カ月をかけて境内を横切っていました。この燈明台は、旧所有者の深川不動堂を始め、江東区ならびに地域の方々と一緒に保存することができました。地域の住民として、また文化財保護推進協力員として保存活動に携わった三嶽俊司氏撮影の写真と思ひ出話を紹介します。

深川不動堂から深川公園へ 移設のルート



移設地まで本堂の前を横断してレールが敷かれた。燈明台本体の下に土台を組み、1時間に1.5mの移動という慎重な作業だった。移転先の深川公園敷地では7月から耐震工事が行われた。

平成21年2月、枠囲を含め、石造燈明台の移設が完了した。区民の保存運動が反映され永久保存が確立された。

石造燈明台の設計者・佐立七次郎の現存する作品

平成21年2月撮影

- ① 日本水準原点標庫（都指定有形文化財）永田町国会前洋式庭園内。日本の標高の原点標を保護するため明治24年に建てられた。石造ローマ風神殿建築に倣った近代洋風建築。
- ② 旧日本郵船（株）小樽支店（国指定重要文化財）明治39年竣工

深川公園余録

地域の長老の話

深川公園には池があったが、戦争中に鯉や亀も一緒に埋め立てられ、その跡を軍が使用して飛行船を置いていた。深川公園は、不動尊縁日（28日）、八幡宮縁日（1日・15日）には屋台などで大変賑わったが、雨が降ると鯉と亀の崇りと話題になった。（深川不動堂に供養塔が現存する）

（文化財保護推進協力員 三嶽俊司）

「旧中川から見た亀戸」

平成21年7月19日(土)～8月30日(日)

中川船番所資料館では、中川(現在の旧中川)北十間川・堅川・横十間川など、江東区の北部・東部を流れる河川との関わりを中心に亀戸の歴史を紹介する「旧中川から見た亀戸」を開催します。

近代以前の亀戸村は現在の亀戸の大部分と、北十間川北岸(墨田区文花・立花の一部)と堅川南岸(江東区大島の一部)、横十間川西岸(墨田区太平・錦糸・江東橋の一部)に広がっていました。河川が村境となっていないのは、これらの河川が後から開削されたことを表しています。



【入神明宮 大平榎】(江戸名所図会)

亀戸3丁目にある香取神社の社伝によれば、古代の亀戸は海中の孤島で、亀のような形をしていたことから「亀島(亀津島)」と呼ばれていた

とされていますが、史料上では応永5年(1398)の「葛西御厨田数注文」に「亀津村」とあるのが初見です。当時の亀戸は江戸湾と中川流域の葛西(葛飾区)・青戸(同)などを結ぶ水上交通の要衝として栄えており、梶取り(船乗り)の守護神とされる香取神社が鎮守として祀られていました。また、入神明宮には漁師が網を干すために使っていたとされる「太平榎」があり、実際にその跡地から、平安鎌倉時代(9～14世紀)のものと思われる土錘が発見されました。この土錘は現在、香取神社で保管されています。

明暦3年(1657)正月の「明暦の大火」の後、万治3年(1660)に本所奉行となった徳山五兵衛と山崎四郎左衛門は、河川の開削や橋の建設などを進め、本所・深川一帯の整備を行いました。この頃に開削されたのが、堅川・横川(大横川)・十間川(横十間川)・北十間川です。東西に流れる川を「堅川」、南北に流れる川を「横川」と呼ぶのは、それぞれ江戸城(現在の皇居)から見て堅(縦)と横に当たる

ためです。また、北十間川は古隅田川の旧河道の一つで、中世まであった海岸線を利用して開削されたといわれています(「江東区史」)。

江戸時代の亀戸村では米や野菜を生産しており、中でも亀戸大根が有名でしたが、川に囲まれていたためにたびたび水害に見舞われていました。亀戸水神社は地域を水害から守るために勧請された神社で、亀戸村の人々の信仰を集めていた神社です。当時、水神社の周辺には「水神森」と呼ばれた森があり、現在はバス停や交番の名前として残っていますが、教育委員会では明治末頃の水神社と「水神森」を描いた屏風を所蔵しています。

今回はこの屏風の他にも、亀戸村で



水神森屏風

地主経営を行っていた牧野家の古文書や、昭和32年刊行の『江東区史』編纂の際に撮影された写真などを展示します。地域の歴史を表す貴重な資料を、この機会にぜひご覧ください。

(中川船番所資料館 鈴木将典)



昭和30年ごろの亀戸駅

中川船番所資料館

開館時間

午前9時～午後5時
(4時30分までお入りください)

展示室休室

毎週月曜日(祝祭日は除く)

入館料

大人200円 小中学生50円

交通

都営地下鉄新宿線東大島駅
(大島口)下車 徒歩5分

問合せ

江東区中川船番所資料館
江東区大島9-1-15
☎03(6636)9006-1

関連イベントとして、8月23日(日)の午後1時から、ミュージアムトークを開催します。

中川番所の史料をもとめて

奥州幕領の廻米輸送

江東区古文書調査団（団長・吉原健一郎・成城大学教授）では、平成一六年度の茨城県立歴史館、平成一七・一八年度の群馬県立文書館（調査報告は『下町文化』No.二二九、二三八号を参照のこと）に続いて、福島県歴史資料館（福島市）で福島県域に残る江東区関連の古文書所在調査を行いました。福島県歴史資料館は、昭和四五年（一九七〇）に開館し、福島県の歴史を明らかにするため、古文書・公文書の収集・保存、閲覧公開を行っています。

を輸送するため、中川番所通行の許可を願い出ました。それが次の史料です。

覚

奥州白川郡東館村

名主

上乘 半左衛門

同州同郡上石井村

名主

同 源左衛門

一 御米千六百五拾五俵壹斗三升八合

但三斗七升入

此石六百拾貳石四斗八升八合

船頭 権兵衛

〃 清左衛門

〃 金左衛門

〃 銀次郎

右者添田一郎次御代官所奥州村々当卯御年貢江戸御廻米并置居米共二為積請之、今十日常州当ヶ崎出帆申、後日其御番所無相違御通可被成候、以上

常州当ヶ崎出役

添田一郎次手附

天保二卯年十二月十日 佐藤与吉

中川

今回紹介するのは、幕府領の年貢米廻送に関する資料です。天保二年（一八三一）に小名浜代官所領の年貢米

御関所

御当番衆中

（東白川郡塙町 益子静家文書11

福島県歴史資料館蔵）

天保二年二月一〇日に白河郡東館村（現東白川郡矢祭町）の名主半左衛門と上石井村（現東白川郡塙町）の名主源左衛門が、小名浜代官添田一郎次支配の村々から集めた年貢米一六五五俵余を輸送するため、中川番所に提出しています。書類によれば、一二月一〇日に常州当ヶ崎（現茨城県銚田市）を出帆し、その後中川番所を通行するので、許可を願いたい旨の内容が記されています。

この廻米はどのようなルートで通ったのでしょうか。この時の運送ルートについてはつかみませんが、同様のルートを使ったと思われる事例を紹介いたします。天保一〇年（一八三九）に当ヶ崎河岸から江戸に年貢米を輸送した際、作成された「船中日帳」には、河岸や村に到着した日時と村名、村の名主の名前が書き上げてあります。年貢米は四艘の船に振り分けられて乗せられており、常陸国鹿島郡高浜村（現茨城県神栖市）の直乗船頭重右衛門ら、利根川下流域の船頭たちによって運ばれました。



現在の銚田河岸（現茨城県銚田市）

「船中日帳」に記されている運送行程を整理したのが左側の表です。一月一日に山田村（茨城県銚田市）を出発、北浦を南下して利根川に入って遡上します。角崎町歩（茨城県稲敷郡河内町）に一二月二二日に到着すると、二七日まで六日間滞在しています。二七日に竹袋村（千葉県印西市）を出発し、小堀河岸（茨城県取手市）で新年を迎えます。その後、関宿台町（千葉県野田市）、松戸宿（千葉県松戸市）で数日滞在して「荷野上村（二之江村）」（江戸川区）に到着します。浅草御蔵を示していると思われる「江戸町衆場」に到着したのが、一月二八日のことで、

天保10年(1839) 「船中日帳」にみる船の動向

村名	現地名	到着(滞在)日時
山田村	茨城県行方市山田	12月15日
延方村	茨城県潮来市延方	12月16日7ツ時
潮来村	茨城県潮来市潮来	12月17日8ツ時
牛堀村	茨城県潮来市牛堀	12月18日7ツ時
石納村	千葉県香取市石納	12月19日7ツ時
拾三間戸村	茨城県稲敷郡河内町十三間戸	12月20日7ツ時
金江津村	茨城県稲敷市金江津	12月21日7ツ時
角崎町歩	茨城県稲敷郡河内町角崎町歩	12月22~27日
竹袋村	千葉県印西市竹袋	12月27日酉刻
小堀河岸	茨城県取手市小堀	12月28日~1月1日
取手宿	茨城県取手市取手	1月2日
舟戸村	千葉県柏市船戸	1月3日申刻
三ツ堀村	千葉県野田市三ツ堀	1月4日
長谷村	茨城県常総市長谷	1月5日
古布内村	茨城県板東市古布内 千葉県野田市古布内	1月6日申刻
桐ヶ作村	千葉県野田市桐ヶ作	1月7日申刻
関宿台町	千葉県野田市関宿台町	1月8日申刻
浦向村	茨城県猿島郡境町浦向	1月11日申刻
境町	茨城県猿島郡境町	1月12日
西宝珠花村	埼玉県春日部市西宝珠花	1月13日
岡田村	千葉県野田市岡田	1月14日
今上村	千葉県野田市今上	1月16日
半割村	埼玉県吉川市半割	1月17日
松戸宿	千葉県松戸市松戸	1月18~21日
市川村	千葉県市川市市川	1月22日
荷野上村 (二之江村)	東京都江戸川区二之江町	1月23~27日
江戸町衆場		1月28日

※菊池田夫家文書396(福島県歴史資料館蔵)より作成した。

ほぼ一ヶ月半ほどかけて年貢米を輸送したことになります。

出発地となった当ヶ崎は、北浦の北端に流れる巴川の左岸に位置し、水戸と北浦・利根川をつなぐ河川交通の要衝として栄えました。元治元年(一八六四)におきた元治甲子の変(天狗党の乱)では、幕府軍の糧米等の補給基地にもなっています(『茨城県の地名』平凡社)。

このように奥州東南部に位置する幕府小名浜代官領、埴代官領から輸送さ

れる年貢米は、太平洋岸の平潟湊(茨城県北茨城市)から海路を経由して那珂湊(茨城県ひたちなか市)に入津、そこから陸路・巴川などを經由して

当ヶ崎河岸に届けられるのが一般的であったようです。そして、北浦、利根川、江戸川を経由して江戸へと運ぶルート、通称「内川廻し」と呼ばれる方法を用いていました。

一方、鹿島灘を越えて銚子、潮来を経由して房総半島を廻る「大廻し」と呼ばれる方法もありました。東北地方

の大名や商人の荷物は、この「大廻し」を利用することが多かったようです。これは「内川廻し」は日数がかかること、經由地が増えることで輸送料や蔵

敷料が高むことが要因であったと考えられます。しかし、「大廻し」による輸送は船が難破したり、座礁するといった危険性が伴うものでもありました。文政五年(一八二二)一月八日、仙台領寒風沢(宮城県塩竈市)から積み出された陸奥国の幕府年貢米が平潟湊沖で大風にあおられて座礁したため、周

辺の漁船などが徴発されて年貢米を救出する作業が行われています(『那珂湊市史料』第一四集 一九九三)。

このように幕府の年貢米輸送は、多少時間がかかっても安全に運ぶことが大事であったため、「内川廻し」を利用することが多かったのではないかと考えられます。

下総国猿島郡境町の河岸問屋小松原家には弘化四年(一八四七)に写された「中川御番所御規定伝達」という史料が残されています。この史料は中川番所を通らなければいけない荷物(御規定物)の種類と査検の方法について記されています。米荷物は、御規定物とされ、幕府の年貢米については、国・村名、代官名、納名主名を確認することが取り決められていました(『中川船番所資料館常設展示図録』など)。したがって、前述した天保二年の年貢米輸送について、中川番所への届書が提出されたのです。

中川番所は、東北地方や北関東と江戸とを結びつける水上交通の関所であったため、他地域にも資料が点在しています。今後も各地の資料保存機関の資料調査を進めていくことで、中川番所の実態を解明する手がかりにしていければと考えております。

(文化財専門員 龍澤 潤)

ココにも歴史があった

左の写真は、明治44年（1911）7月26日の暴風雨後の状況を撮影した絵葉書集の中の2枚です。この暴風雨は東京市全体で死者55名、行方不明者10名、浸水家屋64733戸という被害をもたらしました。江東区はとりわけ被害がひどく、高潮によって海岸近くの建物が倒れ、その下敷きになって亡くなられた方もありました。

上の写真は現在の東陽1丁目付近で撮影されたもので、横倒しになった公衆電話（写真では「自働電話」と書かれています）が見えます。手前の2人の人物は公衆電話が建っていた跡を見つめています。その後ろに写っている白っぽい服の人物は、被災現場の見廻りに派遣された警察官とみられます。



下の写真は海辺橋のたもとから南側を向いて撮影したもの（奥に写っている建物は正覚寺です）で、明治時代の海木造の海

辺橋が写っている貴重な写真です。写真には、川並と呼ばれる木場の筏師が橋の上から鳶口を使って、高潮で流出した木場の材木から橋脚を守っている様子が写されています。奥には鳶口を持つ材木に乗り移っている川並たちの姿も見えます。

橋の上や岸辺には川面の材木を不安そうに眺める人々が詰めかけています。この海辺橋は路面電車も通る丈夫な木橋でしたが、それでもこうした際には、現在の鉄橋とは異なる苦労があったようです。

なお、この絵葉書は大阪府豊中市の亀田正也氏からご寄贈頂いたものです。

（文化財専門員 中西 崇）



大石家のノリ養殖道具

囲炉裏ぼた（旧大石家日記）⑨

江東区最古の民家、旧大石家住宅（区指定文化財）が建てられたのは、今から160年以上前（江戸時代）と考えられます。そんな昔に建てられた家が、時代の波に押しつぶされることなく、現代に残されたことから、大変貴重な建物といえます。

また、建物が残ったことで、同家が生業としていたノリ養殖の道具も残りました。農業とノリ養殖の兼業であった同家の土間壁際には、ヒビ建ての穴を掘る「振り棒」や採取し細かく砕いた海苔を乾かす海苔簾などが展示されています。

そもそもノリ養殖は、内湾の広い範囲で行われ、砂町地域でも明治中期にはじまりました。深川・葛西・浦安などとも連携しつつ、昭和37年に漁業権が消滅するまで盛んに行われました。以前の聞き取り調査によれば、砂町の海苔は高級でとても高く売れたそうので、組合解散時には「海苔屋」（養殖を行う家）が100軒ほどあったようです。砂町の商人も「景気は海からくる」といっていたようで、海苔生産とともに生きた人々の姿が浮かんできます。大石家も、そんな「海苔屋」の



土間にあるノリ養殖道具

一軒だったのでしょう。とはいえ、ノリ養殖は秋から冬の寒い時期に行うため、寒風吹きすさぶ海が舞台です。寒さ、冷たさの中、大変な労力を必要としたことでしょう。

このようなことに思いを馳せつつ、旧大石家の道具を見ると、この家が江戸時代の建物というだけでなく、そこに住む人々の生活を支えた場でもあったとつくづく思われます。

ぜひ一度、旧大石家住宅にお越しください。そして、そこに生きた人々の息吹を感じてください。

（文化財専門員 出口宏幸）

場所 江東区南砂5-24地先

（仙台堀川公園内）

公開日 土・日・祝

時間 午前10時〜午後4時